

# 地稽古 攻防の間合で兆しをとらえる稽古

前述の通り、互いに先の気位を持ちながら、間を詰め過ぎず、掛かり手は攻め

勝ち、気位で優位に立って打突につなげることが大切です。



東京八段戦にて

間合の種類には、遠間、触刃の間合、交刃の間合、一足一刀の間合、近間とあります。相手と攻め合う中で、とくに交刃の間合から一足一刀の間合に入るその過程については「宇宙の間合」、大人に対しては「攻防の間合」と仮に呼称し、勝負どころの大事な間合であることを伝えるようにしています。

この攻防の間合では相互に緊迫した状態となります。この緊迫の中で、先攻めにより相手の

間合の種類には、遠間、触刃の間合、交刃の間合、一足一刀の間合、近間とあります。相手と攻め合う中で、とくに交刃の間合から一足一刀の間合に入るその過程については「宇宙の間合」、大人に対しては「攻防の間合」と仮に呼称し、勝負どころの大事な間合であることを伝えるようにしています。

その気を感じ取りながら溜めをつくり、相手の打とうとする兆しを感じつつ、予測して打突します。打突後に、縁を切らず、先の攻めによりただちに触刃の間合あるいは交刃の間合になると、続く攻防を優位に進めることができます。打突が打突部位を捉えられず不十分だった時こそ、打ち切る気持ちと体さばきを大切にすることが大切です。

高段位の稽古においては、触刃の間合においてすでに合気となり、交刃の間合から一足一刀の間合に入るところの稽古がとて大切になります。ここで構えを崩さないこと、動揺をしないことなどができるかどうかで、相手との力量の差が出ます。ここで相手を感知できず技を出すことができないのなら、それは課題になります。大切なのは攻防の間合において、有利になって勝って打つことです。勝って打つ一本を少しでも多く稽古で出せるように心がけることが大切です。

その際、相手に対し有利に進めることができないポイントがいくつかあります。たとえば、左拳が前に出てしまうケースがありますが、打突するまで左手を動かさないことが肝要であると思います。手元が動くことと相手に打ち気を察知されやすいからです。中段の構えを維持した状態で、間合を足で詰めていきながら、相手を引き出すのが攻めであると考えています。左拳が動かないのであれば、相手の攻めに対してはぐつと我慢をしてこらえることができます。我慢をしながら足で攻めていく意識を大切にしたいと考えています。

私は大正大学剣道部で監督をつとめています。大学生は勢いがありますから、パワーとスピードに任せて打つことができますが、年齢を重ねればそのような打突はできなくなります。とくに、中高年から剣道を始めた方には「勢いのある打ち」を体得することが難しく、無理な動きが出てきます。勢いのある打ちとは、目に見えるスピードや迫力のことではなく、攻め合いの中で優位に立ち、勝って打つことでその人にとって一番勢いのある打突になると思います。



撮影協力=望月彰  
(初音錦志塾・大正大学  
助監督・NTT東日本)